

神社合祀における神社 の鎮座地に伴う偏差

(参考文献追加版)

日本民俗学会第73回年会

2021/10/10

由谷 裕哉

(小松短期大学名誉教授・金沢大学客員研究員)

1

1 神社合祀の研究史への疑念

- ▶ 思想史、社会学、宗教学などからの“**統制**”視
 - ▶ 橋川文三、森岡清美、米地實*、村上重良ら
 - ▶ *米地實『村落祭祀と国家統制』（御茶の水書房、1977）
- ▶ 民俗学における“**抵抗**”視
 - ▶ 萩原龍夫、鈴木通大、田澤直人、喜多村理子、徳丸亞木*ら
 - ▶ *徳丸亞木「神社合祀政策における氏神・祖先・「森」の認識—全国神職会会報を中心として」（『歴史人類』33, 2005）
- ▶ *以外の書誌は、由谷裕哉(編)『神社合祀 再考』（岩田書院、2020）を参照。
 - ▶ 同書において発表者は、とくに民俗学者による先行研究は **ロマン主義**に基づいているのでは、と定位；←合祀前の神社—氏子関係を理想視。

2

- ▶ そもそも“**抵抗**”視点には、森岡氏が上記の後に神社合祀について既に指摘していた（『近代の集落神社と国家統制』）、神社合祀に**神社神職、氏子、行政**という**3つのアクター**が介在する、という捉え方が全く欠落している。
- ▶ “抵抗”視点は↑**国家権力 対 無辜な民衆**、という対立のみ。
- ▶ 対して、畔上直樹による“抵抗”と“容認”論；『村の鎮守と戦前日本』（有志舎、2009）
 - ▶ 発表者は、畔上による**抵抗と容認**、という枠組は神社合祀の一面を捉えてはいるものの、神社合祀を含むいわば文脈においてはそれ以外の問題が大きいのでは、と考えている。
- ▶ 本発表で取り上げる“**鎮座地に伴う偏差**”もその一つ。

3

2 考察する事例について

- ▶ 石川県の旧石川郡において度重なる神社合祀を行った、旧県社・**大野湊神社**(同郡大野村字寺中、現・金沢市寺中町)の神社合祀について考察を加える。
 - ▶ 同郡の神社合祀について発表者は既に、予稿集に示した旧松任町とその近郊村計11村の事例を分析した；
 - ▶ 由谷裕哉「神社明細帳と神社合祀—旧石川郡松任町の事例から—」（『神道宗教』262, 2021；概要は予稿を参照）
 - ▶ 石川郡の神社合祀状況；M17(1884)⇒T1(1912)は**67.8%**
 - ▶ なお、石川県における神社合祀方針は、M39県告諭による**一大字一社、無格社廃祀**。
 - ▶ + 石川県庁所蔵の神社明細帳は、**廃祀された神社の分**は廃棄されている。

4

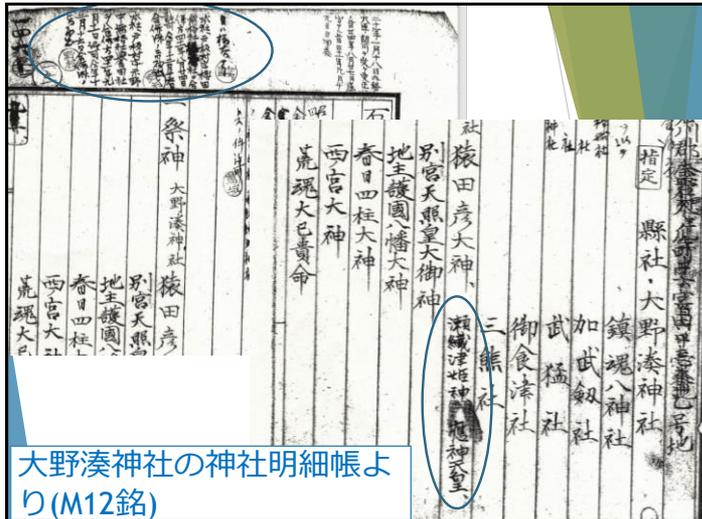
2.1 神社合祀の実態

- ▶ 明治41年(1908)12月、戸板村字櫻田の無格社**桜谷社**および同村字示野中の**萱田社**を合併。
- ▶ 大正3年(1914)10月、金石町上越前町の無格社**菅原神社**を境内神社白山神社へ合併。
- ▶ 昭和20年(1945)12月、金石町冬瓜(かもり)町の無格社**天磐豫樟船(アメノイワクスフネ)社**、同町上寺町の同**鎮火社**、同町下新浜町の同**西宮社**を飛び地境内社とする。
 - ▶ 『皇国地誌 加賀国石川郡宿町誌』の「金石町」*に、上記4社以外にもう1社掲載されている金石町横町の無格社**鎮火社**は、大正15年(1926)に境内地を編入することによって村社に列格、**秋葉神社**と改称され合祀されなかった；(*『石川県史資料』近代編2, p.574)
 - ▶ ↳ 宗教法人の神社として金沢市金石西2丁目に現存。

5

- ▶ 両社とも廃祀となった理由は、**基本財産**問題であった由(境内地が狭い為か)。建物と境内は両社とも**存続**するも、神社本庁所属の神社ではない。
 - ▶ 大野湊神社の神社明細帳では、両社の祭神(**瀬織津姫神**と**応神天皇**)を合祀したことになっている；⇒次スライド
 - ▶ 戸板村は16大字で、神社明細帳が残る12大字は、全て1大字に1社で村社以上；[←合祀された2社は無格社]
 - ▶ 戸板村としては16大字のうち、もともと神社無しの大字が2大字あり(二口六丁、南広岡；皇国地誌に神社データ無し)、県告諭による1大字1社の方針が重視されなかった可能性も有り。
 - ▶ なお、**桜谷社**は地元の言い伝えでは、昭和8年頃に御神体を当社に遷座(いわゆる復祀)したとされるが、現在も桜田町は大野湊神社の氏子となっている(示野中町も同上)；←明細帳の祭神においても、追加された瀬織津姫神は消去されていない。

6



大野湊神社の神社明細帳より(M12銘)

7

2.2 大野湊神社を巡る近世の動向

- ▶ **神社合祀前の状態**を先行研究の民俗学者たちのように**予定調和的**なものと**ロマン主義的**に捉えることは、史実から目を背けることに。
- ▶ 近世からこの神社と信者・地域社会との関わりは、きわめて流動的であった。ここでは、以下の2点を。

2.2.1 遷座にまつわる近世(以降)の縁起とそれを再現する夏季祭礼

- ▶ 大野湊神社には近世から複数の縁起があり、その中で**宮腰**(旧社地；≒金石町)から**寺中**(現社地)への遷座に触れている。貞享2年(1685)の藩への寺社書き上げ、同社で最も重視されているとされる享保14年(1749)の縁起などでは、後深草院の建長年中に旧地の竿林から東8町にある浄地である現社地に遷座したとする。

8

- ▶ 明治12年の明細帳では、遷座年を建長4(1252)と明記する。
- ▶ しかし、『皇国地誌 石川郡宿町誌』では、建長4年に焼失により8町東の「寺中宮」に合祀したとすると共に、いにしえに西の方向に源平盛衰記に「佐良嶽」と出る真砂山竿林と称す社地があったが、暴風で崩壊したため、**寛永15年(1638)**に寺中村地内にある八幡宮と合祀し、よって寺中宮と称す、ともしている(『石川県史資料』近代編2, p.574);
 - ▶ ↑そもそも、(竿林がどこかは置くとして)寺中は宮腰から真東ではない(東南方向)。
- ▶ これと同様に、同社が中世末頃まで宮腰にあったとする別の情報もある。前田利家が天正14年(1586)に佐那嶽社(大野湊神社)を再興しようと、宮腰村の田地2町を寄進した文書が、「**宮腰村佐那武明神為再興**」と始まること¹があげられる(『金石町誌』p.89)。

9

- ▶ これに続く同年の文書では、佐那武明神社の再興のため、宮腰村、大野村、示野村などを「右の村々として令馳走」云々とある。これらの文書には利家の黒印があるので、宮腰村の田地2町を**黒印領**だったと解釈する見解もある(『金沢市大野町史』)+**宮腰村**や**示野村**などを氏子とした、ということでは。
- ▶ とまれ、慶長8年(1603)に「寺中さらたけ明神」と記す文書があるので(『金石町誌』p.121)、寛永15年まで佐那嶽社が**宮腰村**に立地していたことは疑わしいが、利家の田地寄進により同村と深い関係があり、また同村および**示野村**(中世末までの名称)を氏子としていたのは確実。
 - ▶ 享保16銘で櫻田村と示野中村を「産子」とする文書有り。
- ▶ 上記のうち宮腰からの**遷座**を再現するのが、同社の**夏季祭礼**である(8月1-3日、現在は8月第1日曜日が3日目、昨年本年はコロナウイルス禍のため実施せず)
 - ▶ 近世の6月15日の祭礼を継承と伝。同祭礼は寛永年間頃(遷座直後の可能性もあるか) 始まったともされる。

10

- ▶ 各種の縁起に3神と出る**猿田彦大神**(縁起に出る漂着神)、**天照大神**(御厨由来か)、**八幡大神**(寺中の地主神)のうち、夏季祭礼では**天照大神**と**猿田彦大神**の神輿が渡御。他に金石町の2町が新たに作った神輿2基も供奉。
- ▶ 初日は竿林の旧地とされる**海岸部の仮神殿**へ渡御。最終日の還幸で、**天磐樟船神社**、**鎮火社**(現称・秋葉神社)**@上寺町**、**西宮社**(現称・西之宮神社)にも渡御。なお、還幸で回る順序(や神社)は年によって異なる由。
 - ▶ 仮神殿は常設。上記3社も現存しているが、神社本庁所属の神社ではない(実は、大正3年に合祀された菅原神社も同上;←今回は触れられないが...)
- ▶ ↑大正3年の菅原神社@上越前町の境内社への合併、昭和20年の3社合祀(飛び地境内社化)は、このような旧社地からの**遷座**を回顧する**夏季祭礼**と対応すると考えられる。

11

2.2.2 宮腰の地への修験の影響

- ▶ (発表時間の関係もあり、ごく簡略に)
- ▶ 神社合祀(のみ)が**地域社会における神社の位置**を変えたのではない、ということの証左として、**宮腰の地と修験との関わり**を概観する。
 - ▶ 前出貞享2年の寺社改めでは、宮腰に本山派修験が1院、当山派が3院坊書き上げていた。
 - ▶ 天明年間(1781-89)以前の成立とされる『**加州能州越中社方並山伏等惣帳**』(金沢市立図書館加越能文庫所蔵)には、上記4院坊のうち下記3者が掲載。
 - ▶ 大乘院(本山派乾貞寺触下)
 - ▶ 宝光院(当山派医王寺触下)
 - ▶ 明力坊(同上)

12

- ▶ 天保6年(1835)の『加州神号帳』に、**石川郡宮腰延寿寺**が「薬師」ほかの別当として名前が出る。
 - ▶ 同史料は加賀藩が社人のいない小社の祭神や所在地、管理者などを調べたもの；『加越能寺社由来』下巻、p.9
 - ▶ 「薬師」は少彦名社を祭神とした天磐禰船社を意味する？
 - ▶ “延寿寺”は延寿院と記される場合もあり、**当山派宝光院**の後裔とされる。
- ▶ つまり、宝光院-延寿院(延寿寺)は、宮腰において**小社の別当**だったということ。
 - ▶ 先述した同社夏季祭礼3日目に山伏の所作を模した“**悪魔払い**”が行われることから、宮腰の宗教文化に宝光院-延寿院のような山伏が関わっていたことは確実。

13

3 結論

- ▶ 本事例では神社合祀前の神社-地域社会関係が零度ではなく、(修験を含み)近世からの変動の途中経過。
- ▶ 大野湊神社の3度の神社合祀は、旧社地宮腰を含むかつての氏子圏を**包摂**する動き、と解釈できるのでは。
 - ▶ ↑神社側から捉えた場合。
 - ▶ M39県告諭による**一大字一社、無格社廃祀**、とも対応（大野村は7大字全て一大字一社に、金石町には村社に列格した秋葉神社1社が存置）。
 - ▶ 戸板村の2社が合祀されたのは、同村にはもともと神社無しの大字が2つあり、一大字一社より**無格社廃祀を優先した**為か；←村としての対応を考えれば。

発表終了後、researchmapに配付資料を公開予定です。

14

(追記)予稿で参照した発表者の既発表論文

- ▶ 由谷裕哉「小松市内の神社合祀研究・序説」(『小松短期大学論集』25, 2019)
- ▶ 由谷裕哉「茨城県大洗町磯浜における神社の統廃合-神社合祀のロマン主義的解釈に対する代案として-」(由谷<編>『神社合祀 再考』岩田書院, 2020)
- ▶ 由谷裕哉「神社明細帳における神社合祀の研究：小松市南郊外の事例」(『人間社会環境研究』40, 2020);←オンラインでも利用可
- ▶ 由谷裕哉「神社明細帳と神社合祀-旧石川郡松任町の事例から-」(『神道宗教』262, 2021)

15